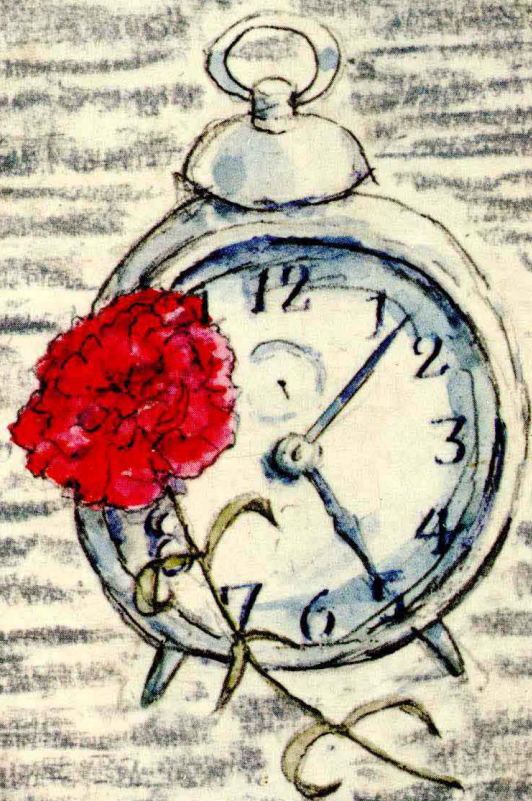


回想の森

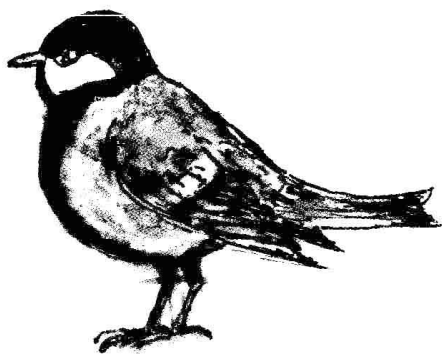
松田解子



新日本出版社

回想の森

松田解子



新日本出版社

松田 解子（まつだ ときこ）

1905年、秋田県に生まれる。

現在、日本民主主義文学同盟員、日本文芸家協会会員

著書『女性苦』

『女性線』

『おりん口伝』

『おりん母子伝』

『桃割れのタイピスト』

『またあらぬ日々に』

『松田解子詩集』

『乳を売る』

回想の森

1979年4月25日 初版

定価 1500円

著者 松田解子

発行者 松宮龍起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(478) 3311

振替番号 東京3-13681

印刷 亨有堂印刷 製本 古賀製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします

回想の森 目次

- 一 太陽とビルと……………5
- 二 わたしの大学と、ある母子像……………21
- 三 忘れがたきその年……………40
- 四 乳母と「ご大典」その他……………64
- 五 プロレタリア作家同盟と「女人芸術」……………83
- 六 プロレタリア作家同盟と「女人芸術」(続)……………105
- 七 生と死と……………128
- 八 帝大セツルメントと亀戸無産者託児所……………146
- 九 その年どし……………165
- 十 その年どし(続)……………185

- 十一 プロレタリア作家同盟の解体と「文学評論」と……………206
- 十二 暗く白き季節に……………228
- 十三 暗く白き季節に（続）……………247
- 十四（終章）炎上する東京の空の下で……………269
- あとがき……………299

装丁 松山文雄

回想の森

『民主文学』一九七八年一月～一九七九年二月連載

一 太陽とビルと

わたしが秋田の山のなかの鉱山から東京へ出て来たのは一九二六年—大正十五年の春であった。

この出京についてわたしには、どうしても忘れられないことがひとつふたつあるが、そのひとつは東京には山がなかったことにたいする深い失望、——ああ、しまった、ここには山がないではないか、と、声にも出してさげびたいような失望であった。

それと、もうひとつは、太陽がこんなに赤くて、大きくてもいいのか、という、不思議さでもあり、驚きでもあった。それは朝の太陽、昇天まぎわの太陽であったはずだ。

けれどもそれから、五十余年もの年月がたってみると、あんなにあのときの太陽は赤くて大きかったんだから、ひよっとしたらあれは落陽ではなかったか、などとも思えて来て、わたしは不安になり、先日上野駅のあれこれの係りや、鉄道博物館などに、当時の秋田発上野着の列車の時間帯をいろいろきいたところ、やはりわたしが乗った「秋田発」が上野についたのは、午前五時か六時の時間帯であり、したがってわたしがあのようにおどろき怪しんだ、まっ赤な太陽は、けっして落陽などではなく、朝の太陽であったのだと、あらためて知った。

それにしても、なぜそのときのわたしはあのように、太陽などにこだわったのか、そしてそのことが、いまだに心にくるとはどうしたことなのか。

かんがえるとそれは、それまでわたしが秋田の山のなかで見た太陽と、あまりにも趣がちがっていたからであった。

そこは銅を掘るやまであったので、下界はいつも、その種の鉱山どくどくの暗さをたたえて低くしずんでいたけれど、太陽は、それが晴れの日であるかぎり、そして熔鉱炉の吐く毒煙がまわりの山から吹きおろす風で長屋部落まで這い寄らないかぎり、いつもひきしまって燃えくるめきながら、東の連山の尖んがりから「いま洗いたて」といわんばかり清すがしい顔を出したものであり、それが落日の場合にしろ、そしてそこに、色かたちさまさまにわたる雲があつたにしろ、そこにのぞいている太陽そのものの顔は、より澄んでいたものであつた。

けれどもそのとき、わたしが目にしたのはじめての東京の太陽は？ それは山からは出ず、この世の涯でもつづくかと思えるような、くろくささくれ立った人家と工場のつらなりの遙かな地平から、燻されでもしたような赤い半顔を、あたかも出しかけていたのである。

ああ、東京には山もなかつたんだと、わたしが心につぶやいたのも、そのときが最初にちがいがいなくなつた。

このようなことを、いまさらに書けば、ではおまえはそのとき、なんのために東京に出て来たのか、ここでも太陽や山を見るためにか、と、問われそうだが、わたしとて、そういうことで出て来たのではなかつた。けれどもそれにこだわつたことは事実だつた。

そのことで、ふりかえってみると、鉱山時代のわたしは、ひと一倍「自然」に——「自然の代表物」でもあろう太陽に親しんでくらした。とくに子供時分のわたしは、そこらのゴミためなどに落ち

ている青や茶いろのビンのかけらをひろつては、それを目にあてて太陽を透かして見るのを、ひとつ
の楽しみにしていたほどであった。

それはどうやら子供にとつても、そこらの下界があまりにも「反自然」で、暗すぎもし、汚なすぎ
もし、みじめすぎもしたせいではなかったかと思われるが、わたしは何につけ上のほうにあるもの
……つまりその鉱山をぐるりととりまいて何重にもかさなっていた山脈や、それらの山の端から山の
端へかかっていた空や、その空を、どういふようもなく自在に、まるで生きたもののように飛び交っ
ていた雲にみとれた。そしてその雲も見当らず、また熔鉱炉の毒煙も舞い狂わなにかぎり、その空のど
こかに、かならず白く燃えかがやいている太陽へと、わたしの目が行った。自分がうまれたその鉱山
以外、どういふ世界も目にいれたことのないわたしにとつて、この世で太陽ほど明るく不可思議で無
害、どんなにそれに見惚れていたとて大人たちからとがめだてをくう恐れのない対象物は、他になか
ったからである。まして、青や茶いろのガラスの破片に透かしてみる太陽の、その刻々の神秘さは、
子供（というよりは、まだ幼童）であったわたしの魂をうばい、またそのガラスの破片にあてた目
を、いったん太陽からひきはなして下界へ移したときの鉱山風景——そこに表面禿げてはいても奥へ
奥へと重畳しながら、つらなっていた山や、そのなかでもっとも禿げのひどいひとつの山に立って
いた熔鉱炉の煙突や、その煙突から、あたかも入道雲のように湧きたまっていた毒煙や、ズリ（鉱
滓）のやまや、大直利橋や、トロッコレールや、寺や、墓地や、墓地のたくさん塔婆板や、そのあ
ちこちでそよいでいた葬式花や、ときおりそのあたりからこちらへ、がおーっ、というような声をあ
げて飛んでくる鳥や、そしてこの鉱山の下まんなかを深くえぐるようにして西へかけくだっていた一
本の毒水の川や、その川岸に、そろって水屋流しの汚れた繩を突き出してへばりついていた鉱夫長屋

や、——それらすべての風景、風物までが、そのとき神秘そのもののように深く色づいて幼童のわたしを酔わせたのである。

そしてそのようにもして見惚れた太陽を、また、鉱山世界を、やがて、ガラス切れなどを透かさず、わたしが自分の肉眼で、むりにも見つめはじめたのは、小学校も高学年になってからであり、さらには、その小学校を高等二年で卒業して、それまで自分としては、はいる気もなかった鉱山事務所の小使にやとわれ、後日の語り種ともなったような、すばしこい庶務主任にタイプライターを仕込まれながら、日給二十銭で使われはじめたからであった。当時——一九二〇年（大正九年）の三菱・荒川鉱山での二十銭は、四等米七分と南京米三分がまじった米一升分であった。わたしは毎月その二十銭の二十八倍ないし二十九倍にあたる六円足らずの賃金のなかから（というのは、月二回の公休日の賃金は差し引かれたので）月々五十銭の女学講義録をとって独学し、その講義録か、それとも附録の「ひこばえ」という小冊子で、記紀歌謡や万葉や、かと思えば、たいそうめずらしい外国の詩人の、ほんの何行かずつに、胸高鳴らせてふれた。なかでも、／この乙女　みまかりぬ　みまかりぬ　恋やみに／人これを　葬りぬ　葬りぬ　明け方に／と、たしかハイネの何行かを読んだときは、わたしの魂は泣いた。わたしはその講義録の書き手のひとりであった、どこかの大学の先生が、詩とは、どう鑑賞すべきか、をおしえるためにそこにかかげた教行のハイネの、とくにしまいの、／人これを　葬りぬ　葬りぬ　明け方に／のくだりに泣かされたのだった。それはわたしが鉱山で、もっともたびたび見たドラマ、自分としても味わったドラマの集約であったがゆえに泣かされたのにちがいないかった。わたしはそれを読むと同時に、「三日にあげず葬式出る」という大人たちの言葉を思い、自分の目では見ることのできなかつた父のこの鉱山での死にざまを思い、その父の父の死にざまをありあり

と目にうかべ、そしてたくさんの、たくさんの鉱夫の葬式だみの行列が、あの墓地へとくり出した事実を思い、また、まさに、／この乙女／とも誦まれるべき、うつくしく若い選鉱乙女や、採鉱乙女が、あれこれの社員たちにもてあそばされ、捨てられて、かの女たち自身それぞれが泣いた事実を思つて泣いたのだつた。それにひきかえ「八雲頭かつ 出雲八重垣。妻籠みに」以下の何行かは、わたしの心はいあらわしようもなく深くあたたため、大きく羽搏かせてくれた。

このようにして胃の腑には生まれ落ちたときからの南京米と四等米の主食のほか、さほどの食い物もいれず、頭には少しばかり美々しすぎたほどの詩句やら鑑賞用「美文」の切れ切れを欲深くつめこみながら、以後の三年間わたしは鉱山事務所へかよつたが、ここでは庶務主任監視下の本棚で、ゲーテを知り、晶子、独歩、四迷その他と大杉栄を知つた。大杉栄のものまでが、なぜそこにあつたのかは、いまだに解げせないことなのだが。ともあれ三年をかけてわたしは、あたりかぎりそれらの本をぬすみ読んだ。

わたしは本にはめぐまれ、すでに小学校時代に友だちの家にあつた「噫無情」や「ポンペイ最後の日」や「天と地の間」などを読んでいた。それらの翻訳本は幼童時分、あれほどにも熱中した太陽以上にもわたしをとらえ、わたしの魂を掘りかえした。わたしはとくに「噫無情」を読んだことで、それまでのようにはなく、少しばかり「客観的」に自分をふりかえつた。自分が鉱山というところに生まれたこと。自分の母が鉱山に嫁に来たばかりに、一度、二度と夫に死なれ、おかげで自分も三度目の父をもつていてということ。そこから来る、誰も、かれもの、人間としての不幸さというものを、その本のおかげでより深く味わい分けはじめた。つまり本の中身のあれこれの人物に、自分をあてはめ、他をもあてはめて、わたしは自分の、想いを（それまでは、どうしようもなくこつていた

想いを)羽搏かせ、そのことで、心のなかの自分の世界を、より広くし、より深くもしたのであった。そうすることで、わたしはしだいに、鉱山社会における差別を知り分けただけではなく、それを憎み、羨やみ、妬み、さげすむようにもなつて行つた。それはしだいに鉱山事務所のおえらがたと三菱への、どう抑えようもない反撥心となつて凝りかたまつて行つた。わたしはその種の経緯を、けつきよくはひとつのいたらない物語りに、虚構をかりてこめてもいるので、ここでは具体例を省くが、ともあれわたしが独学と、さいわいにもめぐり合うことのできたあれこれの本で、思春の心を忙しくしていた期間だけは、太陽凝視の習慣からも、いくらか遠のいたようであつた。が、事務所づとめの三年後、たまたま受験して入学がゆるされた秋田女子師範本科二部を一年間で卒業して、母校の教師として鉱山に舞いもどると旧慣はよみがえり、ふたたびわたしは太陽のとりこともなつて、ついには一編の詩らしきものまで書いたのだつた。おお、さらば／さ霧と夕もやの衾かまどかつぎませ、わが恋びとよ／それはこういつた調子のめんめんたる長詩(?)で、おりから自分の母の生家のある二里半さきの部落のはての西の山へかくれてゆく太陽、落ちてゆく太陽を、生ける恋人に見立ててうたつたもので、題は、「太陽を恋する女のうたえる」であつただけは、それから五十余年を経たいまも、はつきりおぼえている。下界のものすべて燃えたつかのような真夏のひと日、この世の地獄じみた鉱山を飽かず照らしおえた太陽は、わたし、という恋びとを、その地獄の夜におきすてたまま行こうとしている。そこでわたしは、その太陽に向かい、なかなば酔うかのような惜別を、ありあわせの語いに托したのだつた。それはたぶんあの「八雲頭つ、……」の調子のまねであつた。けれどもこれは、当時「種蒔く人」の系統にあつた人びとのものを幅ひろくのせた秋田魁さか新報に投稿したところ載つた。むろんペンネームで「M」または「あむ」として載つたはずである。投稿なので文化らんなどではな

く、三面の、どこか下のほうにはさみこまれてあったように憶えている。それがたまたま活字になつたわたしの最初の詩であるだけに、いつかは探し出したいと思つているが、いまだに果してはいない。
……

というわけで、この普あまねきもの、太陽は、わたしの子供時分からの関心事、対象物であつたのである。

そして、山。山脈もまた。

にもかかわらず、いまここで、わたしが目にした太陽はどうだろう。

そしてわたしの父なるものでもあり、母なるものでもあつたあの分厚い山々はどこへかくれてしまつたのだろうか？

そのときわたしは、「花の都の東京に來たのだ」などという感激は爪のさきほども持たず、むつとりと口をつぐんで、すでに何か、ひじょうな財宝でも遮二むに強奪されて、あの鉢山からここへ抛り出されて來たかのような、やりどころのない不満と悔い、それにもまして、言葉にも心にも（今となつてさえ）尽しがたい不安と期待に、全身をゆすられていたにちがひなかつた。

そのようにして、ともあれ東京の土をふんだわたしは、当時の東京府下滝ノ川町田端の義理の叔父の家に、いわゆる「わらじをぬいだ」であつたが、それからまだ、何日も経っていない、ある曇り日のことであつた。

それが偶然であつたか、それとも意識してのことであつたかは、はっきりしないが、わたしは当時の「省線」（いまの国電）で、東京駅へ降り、いつのまにか、丸の内方向の改札口を出ると、そこにたった一人、ぼろりと立っていた。すると、ただそれだけのことなのに、わたしの胸は締めつけられ

るように痛み出し、同時に動悸が、自分に聞きとれるばかり激しく打ち出した。そのときわたしは自分にさげんでいた。——あれが丸ビルだ、——と。

丸ビル。

東京には丸ビルがある。丸の内ビルディングがある。それは三菱のビルであり、日本で一、二を争うビルであり、そこには三菱のさまざまな「本社」がある。とうぜん三菱鉱業株式会社もあるはずである。ついこのあいだまでわたしが暮らしていたあの鉱山の所有主である三菱鉱業の本社なども。

……

鉱山にいた当時から自分の意識のどこかにひそんでいたその丸ビルを、わたしはそのとき、はじめて直かに自分の目にいれたのである。そしてもういちど「これか」と、思ったのである。するとはいよいよ胸は締めつけられ、心臓は早鐘を打つのであった。なんでこう自分の胸はくるしいのだろう。あのビルを見たからといって。あのビルが自分のま正面に、立っているからといって？

ながいことわたしは、その自問で息を詰めたあと、それでもどうか自分をとりもどし、せっかくここまで来たのだから、とも思い返して、やがて目の前の横断路から横断路へとつつ切り、そしてあのビルのまん前まですすみ出、さらにやがてはあのビルの五体、——体などと呼ぶべくあまりにも四角四面にそそり立った巨大な鉄とコンクリートの室むろのなかに吸いこまれたのだった。そうして、生まれてはじめてエレベーターなどにものり、このビルの最高階までのぼり切ると、そこで降りて、まるで盗みにもはいったもののように心のなかは、おずおずおたおたと、しかし、目は、一つ一つの部屋の所有主の看板をのぞきこみながら他の目を気づかう余裕もなく歩き、しまいには、もと来た一階出口へ戻りつくと、こんどはそこから、まだ「三菱が原」とよばれた名残りのある、いわゆるビジネ

ス街の仲通りを、左右にならぶ赤煉瓦建築に一つ一つ目を吸われながら通りぬけたことだった。むろん通りぬけて何をしたということではなかったが、そうせずにはいられない思いで通りぬけ、そこに三菱第何号館、三菱第何十何号館と、まるで苗字のように三菱の二字を冠した大会社名入りの看板を、つぎつぎと仰いで、あらためて自分の心が、深い不安さに蝕まれたことは、たしかだった。

それから半世紀余の年月が経った今日、わたしはたまたま「当時の三菱地所部の部長または社長であった」という赤星陸治なるひとの原著本、「縮刷丸の内今と昔」という本にめぐりあった。もちろん赤星なる人はわたしの知らぬひとである。またこのひとは、もう故人らしく、文中このひとのありし日をたたえる部分なども目についたが、わたしはこの本ではじめて、半世紀前の自分が、あのようになりぬけるえながら仰いだ丸ビル、おたおたと通りぬけたビジネス街仲通りをふくむあの一帯の概観を得させてもらった。

回想のついでにいまその本にもとづいてさぐり出してみると、あの丸ビルが起工されたのは一九二〇年（大正九年）、その完成は一九二三年（大正十二年）二月だった。

それからまもなくこのビルは改装工事をはじめたが同年四月、東京を襲ったかなりの激震で工事を中止、そのご続行したところ、その五カ月後の九月一日、いよいよあの関東いったいを襲った大激震に見舞われたのだった。けれどもこのビルはよくそれに堪えて完成、以来あとあとまで、総面積二十八万四千坪、のべ百八十三万一千坪を越す広さと、九階頂上までの高さ百九呎、その総容積二億六千余立方米といわれる巨体を、あの場所に据えつづけて来たのだと、わたしははじめて知らされた。

以下も同著からの摘記であるが、九月一日の大激震は、この丸ビルをはじめとして、丸の内のビルの総数が六十三棟にたっしてからの惨事であった。そして激震と同時にこのいったいでも「有楽町一

丁目の一色活版、東京電燈、日比谷・松本楼、大手・東京ガス電気工業、和田倉の帝室林野局から出火、やがて警視庁、帝国劇場、大手町内務省を全焼、ついで大蔵省を焼き、さらに飛び火して、銭瓶町の電話局、専売局を焼き、「なお燃えひろがって呉服橋、大手町以北ならびに鉄道省を灰じんに帰せしめ、午後十二時にいたってようやく熄んだ」。が、ビルで倒壊したのは当時工事中だった内外ビルディング（のちの昭和ビル）と、半壊した東京会館だけ。他は無事だった由、この本には書かれている。

そういうことから丸の内といったいは、すぐにも官民一体の避難民救護センターの趣を呈したらしい様子を、同書はつたえているが、なかでも「逸早く民間のみの救護隊を組織して、めざましい活躍をした三菱地所部の功労は特筆に値する。同部長赤星陸治は率先陣頭に立って全部員をもって救護班を組織し」云々と、その功績をふくめて、丸の内といったいに殺到した避難民のありさまと救護活動を紹介し、「かくて丸の内はやがて、大震災後の首都復興の核心たるの観を呈した」と述べている。

けれども同書にはあの大震災直後出された戒厳令下に、同じ東京で六千名の朝鮮人と、この前年創立された日本共産党の党員をふくむ九名の革命的労働者が、当の戒厳司令部直轄の軍隊の手で虐殺され、また大杉栄と伊藤野枝、大杉の、まだ幼かった甥の宗一が憲兵の手で虐殺されたことなどについてはいっさいふれられていない。

かんがえればそれは当然かもしれない。

これらの虐殺は、同じ東京のなかではあったけれど、右の本のいう「丸の内」というより、その地続きの東京憲兵隊麹町分隊や、江東の亀戸警察などで行われていたのだから。

そしてこの項——関東大震災関係の一項を同縮刷本は、つぎの二句で閉じている。